松下幸之助記念志財団・教員フェローシップ

「木曽馬文化と草原の再生」プログラム報告書

２０２４年9月１４日（土）～１６日（月）

埼玉県立本庄高等学校　安齋　由佳

１　調査での気づき

近年、持続可能な社会への取り組みの一環として環境保全への注目が高まっていることを背景に、高校　生物基礎における「生物の生態系と多様性」についての扱いもより時代に合ったものになってきています。本プログラムへの参加は、かつての日本の里山の意義について深く考え、理科の教師として子どもたちに伝えたいことを再確認できた時間となりました。自然と人間が共生する社会の実現は、現代社会において大きなチャレンジであるものの、私たちの意識が変わることで実現可能であり、取り組んでいかなければならない課題です。そのモデルケースとなる活動を開田高原という土地で目にすることができたこと、中心となってご活躍されている方々と全国から集まった地域ボランティアの方々と交流できたことは大きな収穫となりました。

気づきとして、以下５つの観点が挙げられます。

① 身近な自然を利用した暮らしとそれによって形づくられた景観の意義
② 明治以来の近代化による里山の生物資源のアンダーユースがもたらす影響
③ 伝統的な火入れと草刈りが行われる半自然草地の再生による希少種、絶滅危惧種の保護
④ 人と馬と草地のつながり、「ニゴ」などの伝統的知識や文化の価値と継承
⑤ 地域文化の再生と特色のある地域づくりにつなげるネットワークとリソースの活用

２　調査内容で得た知識を応用した授業実施の概要

＜学校での実践＞

生物基礎の単元　「生物の多様性と生態系　生態系とその保全」の学習前の生徒に対し、

問Ａ：農村（イラストを用意）にて、私たちはどのようにして持続可能な生活ができるか
を考えてもらい、生徒の実態を把握しました。単元の学習後に、「木曽馬文化と草原の再生」と題したパワーポイントを視聴してもらい、学習前に提示したものと同じ農村において、持続可能な生活を送るために一人ずつ職業を決め、
問Ｂ：①自分に何ができるか　②この村がどのようになってほしいか
を KJ 法により回答してもらいました。

＜かんな馬の会　会報「みかぼ　夏号（第３０号）２０２４年１２月発行」＞
「かんな馬の会」は、３０名ほどの有志で木曽馬、道産子など５頭を飼育し、馬を介した循環型社会を目指すとともに学校やお祭りなど地域における馬とのふれあいの場を提供しています。私も一会員として活動に参加してきました。本会報は、会員に加え、埼玉県児玉郡神川町周辺の学校、図書館、商店街などに配布されています。本プログラムの参加について会員や会報を読んでくださる方々と共有したいと思い寄稿しました。
参照：別紙資料１

３　授業実施時の子どもたちの反応や感想

【授業前】
問Ａ：農村（イラストを用意）にて、私たちはどのようにして持続可能な生活ができるかの回答
・自然保護区をつくって人が管理しつつ、動植物をなるべくありのままで管理する。
・木を伐採した分、植林する。
・死骸や糞などを資源にして、物質循環させる。
・定期的に草むしりをし、その草を土にまぜて再利用する。
・家畜を繁殖させ、親を食べる。
【授業後】

問Ｂ：①自分に何ができるかの回答
・草地の手入れ。
・野焼きをする。
・水や草の調節をする。
・草刈りをして動物たちが食べられるように乾燥させたり定期的に管理する。
・牛馬を愛し、体調に神経を配ってあげる。
・毎日牧場の見回りをし、家畜がのびのび生きられるように見守る。
・SNS などで宣伝し、その土地の文化で資金調達する。
②この村がどのようになってほしいかの回答
・日本の馬が少なくなっているため、馬を増やしたいと思った。
・馬はペットではなく人と同じ扱いをしたいと思った。
・たくさんの花が咲く、きれいな田畑
・もっと草原を広げてほしい。
・人間が土地をうばったせいで動物との間で起きている問題があるが、本当は殺さず、安全な感じで生きていきたい。
・SNS などで資金調達し、農村を発展させたい。

4　授業を実施してみた先生自身の感想

【授業前】の回答は、人を中心とした物質に着目したものであるのに対し、【授業後】は、「牛馬を愛し、体調に神経を配ってあげる。」「馬はペットではなく人と同じ扱いをしたいと思った。」という言葉がみられました。これらの言葉から、生徒は人が生態系を管理、利用するという視点から人も他の生物も同じように生態系の一部であり、共生していく方策を探る視点への変化が読み取れると思います。また、里山の意義についても気づきがあったことがわかります。現代の私たちのくらしは、あまりにも自然からかけ離れてしまったために、人もまた自然の一部であるという感覚が希薄になっていることに危機感を感じます。格差社会の拡大による子どもの体験格差の問題もあります。今回のような子どもたちの視点の変化、気づきをつくっていくことは、授業の役割の一つであると改めて感じました。

5　ご自身の体験を語ることによる子どもたちの学びへの影響について一言

自らの体験を単に語ることで思いを子どもたちにぶつけても根付かせることはできません。語りを通じて子どもたちが何かを感じ取り、自分の一部としていこうとするならば伝えたことは生きた学びになると思います。どのような要素によってそれが達成できるのか考えると「本質」に触れることなのかなと思います。「本質」とは実物に触れることだけを意味するのではなく、心が動くものを私は対象として考えています。自分の体験を語ることも十分に「本質」になり得ることだと思います。私が伝えたいと思うことの柱に本プログラムの理念である「自然と人間との共生」があります。昨今、不登校児童生徒の問題が挙げられますが、どの子どももそして大人も「どう生きていけばいいか」ということを思い悩むことがあると思います。人も自然の一部であり、その自然と向き合うことは、生き物がどう生きていけばいいのかという根源的なテーマにもつながるのではないかと考えます。

別紙資料１　＜かんな馬の会　会報「みかぼ　夏号（第３０号）２０２４年１２月発行」＞

今年9月に、環境NPOアースウォッチ・ジャパンと「自然と人間とが共生する社会の実現」を理念の一つとする松下幸之助記念志財団による教員フェローシップ制度にて、「木曽馬の里」がある開田高原に３日間の研修に行ってきました。私のタスクは、調査に参加し、研究者から学んだフィールド科学の現状を教育現場で伝えることです。SDGsは、教育現場でも根幹であり、私の専門とする理科では、『生物多様性』に関わるものが激増しました。『生物多様性』がゴールであれば、そのプロセスとして『生物との共生』があり、どのような関わり合いが人と他生物とのwin-winな関係であるのかを探ることが必要だと感じています。「木曽馬の里」で感じたことは、馬は家畜でもなく愛玩動物でもなく、馬がその土地の一部であるという感覚です。見学時、「木曽馬の里」にいたのは40頭弱、個人で飼育している人も今は稀だということでしたが、どこでも馬が飼えそうな広大な草原とかつて人々が挙って草刈り（草カッパというそうです）をし、厳しくて長い冬の間、馬たちがお腹をすかすことがないようニゴをつくり、塩を買う現金を得るために仔馬を売りに超えた山がありました。手に入れた塩は人が味噌づくりなどに使う一方で、馬が塩分不足にならないように冬は塩を入れた白湯（「みそ汁」と呼んでいたそうです）を与えたそうです。馬がいることで、自然と人々の暮らしのバランスが保たれていました。ご指導いただいた長野県環境保全研究所（畑中健一郎研究員）、岐阜大学 高等研究院（高須正規獣医）、ニゴと草カッパの会（田澤佳子氏、服部泰英氏）は、その再生に向け第一線で活躍されている方々です。ちなみに、「ニゴと草カッパの会」への参加は随時募集とのことです。

教師という仕事をしているので、毎日毎日「教える」という行為をしていますが、本来、モンティロバーツが言うように　『教えるという一方的な行為は存在しない。あるのは、学ぶことだけ。』　なのだろうと思います。『馬を水辺につれていけても水を飲ませることはできない』　ように子どもたちを学校の机に向かわせても本人が学ぶ気がなければ実のところ何も学んではいない。一方、子どもたちの心が動けば無限の学びが生まれると思います。私がライフワークとしてやりたいことは、馬とのふれあいを通じて、何かを感じ、考え、月日を経てそれがその人の価値観になるのか、心のよりどころになるのか、人それぞれわかりませんが、自分の一部としてからだの中で生きていくようなものを掴んでもらえたらと思っています。